日本人の時間体験の諸側面：現在は永遠か？

ジャン＝クロード・ジュゴン

人間存在にとって死は、人生において時間を物質化する。生きられた時間は、世界を前にした主体の永続性に基づく「（過去から未来へと向かう）持続の意識」へと遡るが、主体の生存中に彼に影響を及ぼすさまざまな変化に起因する無常にも関わっている。時間は人間に対してその恒常性、全体性、信憑性について問いかけるが、しかし一方時間が人間の中を流れるため、人間もそれに伴って変化せざるをえない。きわめて多くの変転にもかかわらず、主体の同一性の座標となる自我の意識的な核は、心の構造の補完部分となっているため、原則的には心から消え去ることはありえない。ある人間や民族や文化の時間に対する関係は、それらが主体と取り結ぶ関係について、時間と主体が分かちがたく結びついているため、貴重なヒントを与えてくれる。

時間と持続は日本でどのように体験されたのか。日本列島は島国であるため、またとりわけ、国内で「平和を維持する」ために大陸から自らを切り離そうという断固たる意志によって、孤立の時期を経験した。日本は長いこと自らを「大いなる平和（大和）」の国と呼んできた。この平和主義的理想は確かに高貴なものだが、安心できる予見可能な「永遠の現在」の中でよりよくまどろむために、時間の進行と歴史の流れに対して身を守る密かな手続きでもある。時間がもはや、その流れを物質化する区切りとなる事実によって十分に刻まれていない時は、実際、時間は現在の中で動かなくなるか、規則的な間隔を置いて特に新味もなくそのまま繰り返される同じ出来事（昼夜、四季、日常性等）の、一種の永劫回帰（ミルセア・エリアーデ参照）の中で定期的に回帰することになる。未来へと流れることができない現在の中で止まってしまった時間というテーマは、瀆神の岩を地獄の底で永遠に転がし続けなければならないシーシュポスが具現している。現在の行為を停止して永遠の休息を手に入れることが決してできないこと、それが彼の償いなのだ。日本の生活様式と日本文化の反復的特徴が示しているのは、現在ないしその規則的循環が、過去から情報を引き出して未来をよりよく捉えるよう人間を促す他のふたつの時間を犠牲にして、しばしば高い価値を与えられているということである。『日本文化における時間と空間』の中で加藤周一は日本人について、現在の現実を放棄して過去を再考したり未来に身を投じたりするつもりなどほとんどない、「今ここ」の民族として語っている。

多くの文化的作品が、長すぎる持続のなかに身を置くことを嫌う日本人が評価する刹那主義を反映している。例を挙げてみよう。俳句（束の間に詠まれる超短詩）、短編小説集、早描きのスケッチ、春風に散る満開の桜の美しさ、冬を追いやる秋の紅葉、相撲（1 分の戦い）、包丁の勢いにまかせて短時間で調理された、火を通したものより生のものと相性がいい自然に近い料理、等々。建築においても、永遠の耐久性を持つ石には目もくれず脆い自然の木を選ぶのは、

物事のはかなさへの好みを表している。このようにして、伊勢神宮の境内も 7 世紀以来 20 年ごとに建て替えられてきた。日本人の心は西洋の標準からはかけ離れているが、日本人が知覚しているのは、その心の中にある自我の永続性に結びついた時間の継続性と物の永続性である。自発性と真実性のひとつの形を「今ここで」現前化する能力があるという理由でこの態度を一方的に称える前に、心にとどめておかなければならないことがある。この態度はまた、内面を構築するための「生きられた時間の持続性において」、主体の中には自己への集中を妨げる断絶があることを示すものでもあり、それほどまでにこの態度は現在の環境との一体化を切望しているのである。したがって時間に対する人間の関係は、民族によってかなり異なっている。結局、われわれ全員の中にある人間の心の普遍的構造を理解することによってのみ、文化相互の対話が真の基礎を持つことになるのである。